展示・収蔵品より

美を知る 347

県立博物館（秋田市）

絵図から見える地勢

企画展「秋田県博50年の歩み」

当館蔵「六郡絵図」＝図1＝は、秋田藩の所領6郡（秋田・山本・河辺・仙北・平鹿・雄勝）を描いた絵図である。縦125㌢、横213㌢と大型で、幕末に作成された。江戸時代には現在のように北を上にして描くというルールはなく、この絵図では左方が北となっている。道路、航路、町や村、山岳、河川などが描き込まれ、右下の枠内には各郡の村落数、石高が記されている。上方に細かい字が並んでいるのは、街道の宿場名、宿場間の道のり、久保田城下から藩境までの道のりを記したものである。領国の地勢を一目で把握できるような絵図である。

今日の地図ほどではないが、海岸線や藩境の形などは割と正確に描かれている。秋田藩が江戸前期・中期に作成した絵図＝図2、3＝に比べると、差は歴然だ。江戸時代の間に着実な進歩があったということになるが、恐らくは現地に足を運んでの調査の積み重ねが、こうした正確さに結実したのであろう。この絵図の際立った特徴は、弘前藩、盛岡藩との藩境や、郡境付近の山と川を多数描いたところにある。

例えば現在の和賀岳付近＝図4＝の藩境を見ると、右（南）から薬師岳、阿弥陀岳（現和賀岳）、北阿弥陀、木瓜森（現モッコ岳）の名が見え、またハタキ沢（現八龍沢）、小又沢（現マンダノ沢か）など、たくさんの沢を描いている。山岳・河川名の記述量だけみれば、今日の地図に勝るとも劣らない。

奥羽山脈の奥深くまで熱心に調べたのはなぜだろうか。理由はいろいろ考えられるが、幕府は大名に対して、藩境を詳しく絵図に描き把握するよう勧奨した。藩境の争いは幕府に訴えが持ち込まれるので、裁く立場の幕府からすれば藩境が明瞭であるに越したことはない。

境界を可視化するため、秋田藩は藩境に塚を築いたり、杭を打ったり、定期的に草刈りをしたり、相当の意を払った。山林には村々の共同利用地があって、薪（たきぎ）や草を採取する場所を巡って、領内の村同士で争うこともあった。杉などの山林資源は藩の管理するところでもある。山中の地理を詳しく把握することは、隣藩と対峙（たいじ）し、領民を統治する藩にとって重要であった。

秋田藩に藩境の管理や絵図の作成を担う境目方という部局があった。境目方は役人を各地に派遣し、山や川を詳細に調べ、それを地形絵図という名で絵図にまとめた。この六郡絵図も、そうした現地踏査の積み重ねの結果を示しているのであろう。

ところで、このような藩製の絵図は、行政上の必要から作成するものであり、道路、村・町、山・川など決まった情報しか記さない。絵としてはおおむね無味乾燥だ。ただし中には例外もあって、田沢湖の北に温泉を描いた箇所がある＝図5。楕円（だえん）の中に「玉川湯本」と記し、ここだけ道路を破線で表示している。本来は絵図に描くべき道ではなかったのかもしれない。山中を踏査した役人は、強酸性の湯で疲れを癒やしたのだろうかと想像を巡らせてみたくなる。

（県立博物館主任学芸専門員・新堀道生）

図1　六郡絵図　縦125㌢×横213㌢

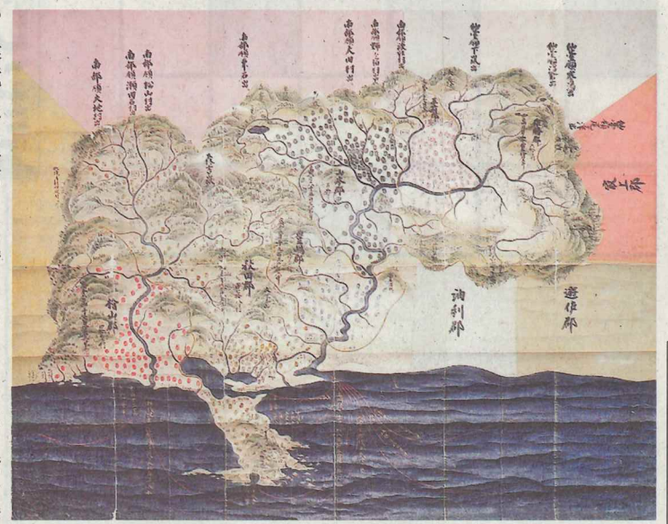

図2　六郡絵図

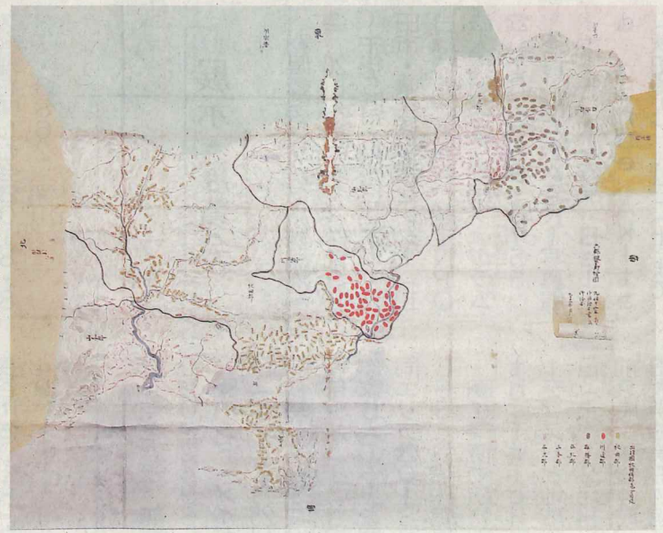

図3　六郡仮下絵図

図4

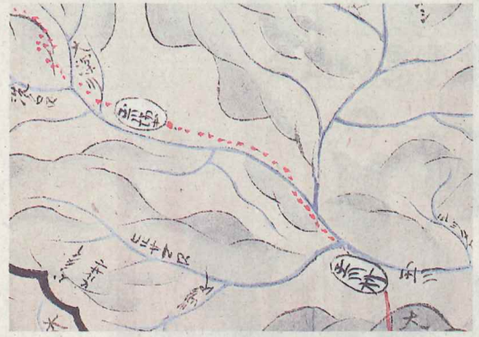

図5

メモ　企画展「秋田県博50年の歩み」は4月5日まで。1975年の開館にまつわる資料、収集品などから半世紀の歩みを振り返る。観覧無料。開館時間は午前9時半～午後4時（4月1日以降は4時半）。月曜休館（祝日の場合は翌平日）。県立博物館☎018・873・4121